

「人の移動研究の新たな展開をめざして」—蘭信三編著『帝国以後の人の移動』合評会—

人々の移動をめぐる 体験と歴史に向き合 うこと

佐原 彩子

2013年12月7日に東京大学駒場Iキャンパス18号館ホールで蘭信三著『帝国以後の人の移動』（勉誠出版）の出版を記念して、関連分野の研究者を招き、同書の合評会が「人の移動研究の新たな展開をめざして」と題して開催された。2008年以降、科学研究費による共同研究の成果として出版されてきた蘭氏を代表者とする他の編著作をシリーズとするならば、同書は、その第4作目と数えることができる。帝国と人の移動をめぐる、特にアジアにおける日本帝国崩壊以後から現在までの人の動きを、ミクロな個人のライフヒストリーも交えつつ、ポストコロニアリズムやグローバリズムというマクロな要素といかに交錯しているのかについての研究成果となっている。その内容は、3つの序章と、21章にわたる論文に加えて、4つのコラム、6つの研究ノートと、多岐にわたる。この構成からも、東アジアを中心とした人の移動の複雑さが十分理解できるといえる。

1000頁を超える大著となった同書を、総勢8名の登壇者、高橋均氏（東京大学）、木村健二氏（下関市立大学）、川喜田敦子氏（中央大学）、権香淑氏（恵泉女学院大学）、五十嵐泰正氏（筑波大学）、内海愛子氏（大阪経済法科大学）、李晶益氏（韓国国立済州大学）、谷垣真理子氏（東京大学）が各々の研究の見地から論じ、また執筆者が必要に応じてフロアから応答するなど、活発な対話が繰り返された会となった。

合評会を通してまず感じたのは、合評する側の研究者も合評される側の研究者も、各々の研究において、人の移動という現象をどのように分析枠組みとして定義するかという問いに真摯に向き合っているということである。これは、蘭氏を代表者とする共同研究メンバーの研究者たちが、国際関係や地域社会、歴史、政治など、人の移動にまつわる多層構造を理解しつつも、「個々のライフヒストリーを大事にしている」（p. 38）からであろう。人の移動に関する研究へのスタンスを共有し、アジアでの歴史文脈へ位置づけることで、個々人の体験を人の移動という歴史的現象として理解するための同書の試みは、移民史という分野にとどまらない研究成果をあげているといえよう。

合評会に参加して、蘭氏が進めてきた人の移動をトランスナショナルに捉える研究を継続する必要性を改めて感じた。同書の序章3章で、蘭氏、上田貴子氏（近畿大学）、外村大氏（東京大学）によってアジアにおける人の移動は分析枠組みとして提示されてはいるが、移動を歴史的に解釈することで、アジアという空間の変容をダイナミックに描き出す取り組みは、まだまだやるべきことがあるように思われるからである。なかでも上田氏のアジアでの人の移動における「中華帝国の溶解と日本帝国の勃興」の関係性は、アジアでの日本帝国の存在を脱中心化する新たな視点を提供するといえよう。これにより、二つの帝国の盛衰と人の移動の関係へ考察が深められるであろう。

帝国という視点を人の移動を理解するために導入することは、人の移動の体験を歴史的な脈に位置付ける重要な試みである。帝国という構造が理解できてこそ、その帝国との関係において人々の移動が規定されていたこと、そして帝国崩壊以後、一定の人々が移動を迫られた状況を分析することが可能となるといえるからである。この点では、合評者の一人である高橋氏が、戦後移民の教訓として「移民くらい経路依存的なものはない」と指摘したのは非常に示唆に富むものであった。移動をめぐる人々の体験と経験に対して、それらを生み出す構造も含め、広い視野で理解を深めていくことの必要性に改めて気づかされた。人の移動をめぐる研究にとってグローバルな視野は不可欠であり、さまざまな地域研究者との連携が新たな視座を生んでいく可能性も強く感じた。人々の移動をめぐる体験と歴史に向き合ってきた研究者たちの研究成果に触れることで、人々の移動体験により深く広く向き合うことの大切さを感じた一日であった。



2013年12月7日合評会にて